



## 杉浦正男さんにインタビュー 戦後の時期の労働運動の経験を聞く

戦後70年の節目の年にあたり、財団法人・全労連会館は、杉浦正男さんの自宅を訪ね、戦後の労働運動の経験についてインタビューをしました。杉浦さんは、戦前の出版工クラブの活動、戦後は全日本印刷出版労働組合を設立し、産別会議幹事、副議長・事務局長を歴任してきた方です。以下はインタビューの要旨です。

○先日、労教協の集会（全国学習交流集会）で講演されたそうですね？

戦前の出版工クラブの話をしました。戦時下の非合法の時代に出版工の運動が10年間続いたのはめずらしい。戦時中いろいろ動きがあって、それらがもとになって産別会議もつくられた。塩田庄兵衛さんの本にも書かれています。戦争中の活動が地下水脈のようにながれ、それが産別会議へ。

○産別会議の解散の時は執行部のなかではいろいろな意見はありましたか？

1958年2月解散の前に、1956年7月に千葉県船橋の玉川旅館で今後の産別会議のゆく道を討議しました。医療と金属だけが残っていたが解散が必至という状況だった。全労連に産別組織を全部移してしまったことがあった。その間産別の活動はほとんどなくなってしまったところで、占領軍命令で全労連が解散させられてしまった。そこで全労連に加盟していた全自動車、金属、全商工などで賃金共闘連絡会をつくって闘いを進めた。

総評は右だったし、やはり産別をのこして、当時、労働者が唯一統一していたメーデー実行委員会に出かけていき、産別会議の方針を入れる努力をしました。産別会議の最大の欠陥は、その国に階級的民主的ナショナルセンターが必要というより、労働者が統一することが大切と考え、傘下の組合にも産業別に統一するならば抜けて結構という考えがありました。産別の組織を全労連に移した時も同じような考えだった。役員から機関紙からすべて移してしまった。ポツダム宣言が一つの綱領のようだった。軍隊

の解体、独占の解体、農地解放、民主主義の復活などを推進してきたアメリカが、占領政策を反共に変化するなかで、印刷などを見ても経済9原則が持ち込まれたときに打撃をうけた。1つの例だが、凸版1100人、東京証券700人、大日本500人くらいの首切り攻撃があった。またレッド・パージの攻撃もあり、傘下の組合の活動家が首になり、組織は弱体化した。

○賃金共闘連絡会はどういう活動を？

全労連が解散させられ、我々の力は全自、港湾、全商工、金属、印刷出版、医療など。一方総評の方は数がどんどん増えていった。朝鮮戦争のなかで労働者への攻撃もあり、総評も要求をだす。しかし国の問題、講和問題などでレベルが低い。そこで賃金共闘のなかで要求で申し入れをし、総評の戦闘化を図る方向をとりました。

○いつまで続けましたか？

日産労組の敗北までですね。53年が大争議ですね。第2組合の塩路一郎が有名ですね。賃金共闘で全面的に支援したが、全労働者のたたかいにならなかった。資本家の方は全資本家が日産労組つぶしで動いた。日産労組はそれまでは職場闘争が活発でいい組合だった。とうとう敗北する。日産労組の敗北で賃金共闘の中心になっていた組合がなくなってしまった。全労連がなくなり階級的組合は産別会議だけになってしまった。レッド・パージで首切られた人たちも首切り反対闘争だったら話は分かるが、当時は裁判所や労働委員会にもっていても、「占領軍命令だから」と受け付けない。そこで首切り反対闘争ではなくそれぞれの単産をいかによくするかという方向になってしまった。事務所がないから産別の事務所に来て、産別も受け入れた。統一委員会も最初はバラバラだったが統一して闘っていきなりました。そこで1951年にひらかれた産別会議第6回拡大執行委員会で産別と統一委員会と一緒に闘おうということになってしまった。

当時共産党も弾圧され、しかも分裂していた。そ

の影響もあった。なによりも根本にあったのは、アメリカがポツダム宣言に反し、日本を単独講和で、自分の枠のなかに日本を取り込んだ。それが今に至るまで続いている。

○杉浦さんは当時、メーデー成功のために奮闘しておられたのでは？

その頃のメーデーは産別も総評も統一して行ってきた。私は産別の渉外担当だったので、メーデーのときに産別の代表として統一メーデーのなかでたたかってきた。激しい議論がありました。単独講和反対、戦争反対をメーデーの中心スローガンへと産別会議は主張、メーデーのたびに統一か分裂かと議論されていた。産別は日本の右傾化とたたかう、力が弱くなってもその方向でたたかった。1951年の22回メーデーでは「人民広場」使用が禁止され、総評は屈して中央メーデーを中止。第23回が「血のメーデー」といわれるメーデーです。朝鮮戦争になってから朝鮮特需で軍事産業、日本経済が活発になった。産別は、労働法規のたたかい、破防法の闘いなどで総評と一緒にやってきた。

○統一をすれば産別を抜けてよいという方向はどうしてとられたのですか？

当時は階級的ナショナルセンターの役割に対する意識が薄かったのでしょうか。産別最後の大会で金属、医療だけでも未組織労働者を組織してやっていこうと決めたのですが、産業別を統一させていこうという方針が訂正されなかったので、金属が総評の全金との統一の話が進み、医療だけが残るとなると、医療も統一の方向へ。

○さきほど賃金共闘のなかで総評系はレベルが低い、との話でしたが具体的には？

レッド・ページのあと、バラバラになった。印刷でいうと大手が抜けてしまった。企業間の競争になってしまいます。このことが全産業に出ている。印刷でいうと打倒大日本、となる。営業などはそれであられる。センターがないからだんだん賃金下がる、残業で何とかやっていく。大手が中小の仕事までとっていく。これではダメだと統一の声が上がるが、統一しようとなると大手が中心になる。その時にレッド・ページで共産党員を追い出したのにまた入れて指導権を取られたら困る。これが金属でもあった。

○賃金闘争という経済闘争の面でも産別は影響を与えていた？

産別の初期、戦後1千万人が餓死すると言われた状況のなかで、物もない中で自然発生的に労働運動が発展した。賃上げでもインフレのなかで毎月のように賃金闘争、どうしても産別闘争が必要だった。産別さまざまだった。レッド・ページ以後はそれがすっかり変わる。大企業は組合に賃金情報を出さなくなる。賃金闘争での影響力はあまりなかったですね。日産での塩路などの分裂攻撃はすさまじかったから。

○産別会議の思い出で最後に何かありますか。

私は平和と労働会館をつくり産別の遺産を処理したり、個人加盟労組を広げる努力もしてきた。しかし今考えると私には、産別のようなナショナルセンターでの活動はむかなかった。戦前の出版工クラブの活動が戦後の個人加盟組合づくりに随分役立ちました。組合活動の本を3冊くらいいただきましたが、労教協で出版したのも12刷くらい重ねました。アメリカは日本労働運動に徹底的な攻撃を加えてきた。これにたいして産別会議は大きな役割を果たした。しかし残念ながら階級的民主的ナショナルセンターの本当の意義を知ったのは、1989年の全労連結成の時でした。

○今日はありがとうございました。

単産、地方労連から単産史、地方労連史などの寄贈をいただき、ありがとうございました。

寄贈いただいた組合は下記の通りです。

全司法労働組合、全日本国立医療労働組合、全国税労働組合、全国税関東信越地方連合会、全税関労働組合、人事院職員組合、国家公務員共済組合連合会病院労働組合、全国自動車交通労働組合総連合会、日本民間放送労働組合連合会、北海道労働組合総連合、静岡県労働組合評議会、愛知県労働組合総連合、奈良県労働組合連合会、兵庫県労働組合総連合、大分県労働組合総連合、神奈川県医労連、全日本年金者組合兵庫県本部。

また、東京地方労働組合評議会からは、多くの貴重な書籍の寄贈がありました。

今後とも、単産・単組や地方・地域労連の歴史・活動をまとめた書籍を蒐集していますので、寄贈をよろしく願います。